

水の浄化、自然の力

鹿児島修学館中学校 二年

三^み好^{よし}

紗^さ理^り依^い

隆々と流れる川の水。こんこんとわき出る池の水。激しく流れ落ちる滝の近くでは、雑音も消され、風と共に触る水しぶきに心が洗われる。休日におとずれた、霧島の水の景色の美しさに、わたしはとても感動した。そして、その水を水資源として口にできる幸せに感謝した。

水資源の多くは、河川水と地下水である。とりわけ、日本の使用水量の多くは、河川水に依存しているという。日本は、降水量にも恵まれ、世界の平均年間降水量の約二倍もあるからだ。

しかし、日本の河川は、流域面積が小さく、勾配が急で短いために、すぐに海へ流れ出す。また、梅雨や台風などのように降雨が季節毎に変わるため、季節変動も大きく、安定した水量の確保は限られてくる。そのため、ダム開発や河口堰など、さまざまな開発を必要と

してきた。開発を進めてきて、需要に見合う水量を確保してきたのだが、河川水は有限であり、ダムなどの開発にも限界が出てきて、水資源を開発し続けることが困難になってきている。

そのような有限の水を有効に使うには、どうすればいいのだろうか。

昨年、わたしは水資源について知り、わたしたちの生活の中で、節水をこころがけ、排水に気をつけることにより、限られた資源を大切にすること、有限なものを無限にしていかなければならないと強く思った。

そして、中学になり、物質の性質、水の性質などを学習したりして、水が様々な状態に変わりうる物質であり、自然体系の中で、形を変えて循環していく事も知った。大気中の水蒸気は雲となり、それが雨や雪などとなり、降ってくる。そして、地下水や河川の水となつて流れてくるのだが、その途中で、人間が利用することにより、汚してしまっているの

である。

汚してしまつた水は、元に戻さなければならぬ。牛乳をコップ一杯流して、汚してしまつた水を元に戻すには、お風呂の水を何杯分も使わなければならぬ。油や洗剤では、もっと必要となる。自分をきれいにするため、多くの洗剤を使い、水、自然を汚していつてはおかしいことなのだ。

わたしたちに出来ることは、使う水はむやみに汚すことなく元に戻すことなのではないだろうか。現在、今までの水道の浄化では、塩素など薬品を多く使い、殺菌を重要視してきた。しかし、人の生活も高度化し、化学有機物などを多く使つたものなどが、汚水に含まれ、塩素と結びつき、トリハロメタンなどの発ガン物質の発生も懸念されてきた。そして、最近では、水の浄化の方法に、炭や炭素繊維、カキがらや浸透膜などを使い、る過や吸着できれいにして、酸素を送り微生物の力をかりて、浄化するシステムなど、画期的な

様々な方法がはじまっている。

わたしは、微生物の力を借りて浄化する方法を知った時、遠い昔、今までの地球、自然が、浄化、再生してきた姿に立ち戻った考え方だと思った。水資源を無限に、持続可能な資源にするためには、私たちは、自然が再生する力やそのスピードを考慮しながら、人が資源を利用する量、スピードを考えて管理していかなければならないと思った。

また、自然が浄化する能力を多大に発揮できる環境づくりも、とても大切だと感じた。川の水をきれいにするには、土壌の菌や微生物や小さな生物が生きる森を育て、それが豊かなプランクトンのため海の生物も育つ海へつながるのだ。

そのためには、やはり、わたしたち一人一人が、有害物質を出さぬよう心がけ、むやみに汚さない配慮を怠ってはいけなと思った。